

第5章 古墳文化とヤマト政権

① 古墳文化の発展

(1) 古墳時代

弥生時代の後期に、すでに大規模な墳丘を持つ墓が各地に築造されていたが、3世紀中頃になると、より大規模な(前方後円墳)が西日本を中心に出現する。古墳は各地の国を支配した首長たちの墓であり、弥生時代の小さな国の指導者の墓と異なり、共同墓地から離れて独立して築造された。各地の有力な首長たちが古墳を造った3世紀後半～7世紀後半までの期間を古墳時代とよぶ。

紀元	世紀	時代	期		
紀元前	4世紀	弥生時代	前期		
	3世紀				
	2世紀		中期		
	1世紀				
紀元後	1世紀	弥生時代	後期	たてつきふんきゆうぼ 楯築墳丘墓(岡山県)	
	2世紀				
	3世紀	古墳時代	前期		
				前半	
				中頃	はしほか 箸墓古墳(奈良県 墳丘長 280m) 最も古い前方後円墳
	後半				
	4世紀		前半	あんどんやま 行燈山古墳(奈良県 墳丘 242m)	
			中頃		
		後半	ごしきづか 五色塚古墳(兵庫県 墳丘 194m)		
	5世紀	古墳時代	中期	だいせん 大仙古墳(大阪府 墳丘長 486m)	
				こんだごびょうやま 蒼田御廟山古墳(大阪府 墳丘長 425m)	
				いなりやま 稲荷山古墳(埼玉県 墳丘長 120m)	
	6世紀	古墳時代	後期		
前半					
中頃					
7世紀	古墳時代	後期	前方後円墳の築造が終わる		
			前半		
			中頃		
	後半				

(2) 古墳築造の変化から解ること

弥生時代後期の墳墓は、それぞれの地域的な特徴が見られる「弥生墳丘墓」であるが、3世紀後半になると、(前方後円墳) を中心とする、より大規模な古墳が造られた。これらの古墳には、長い木棺を竪穴式石室に納める埋葬施設や銅鏡などの多くの呪術的な副葬品などに画一的な特徴を見出すことができる。これは、古墳の築造に先だって広域の政治的連合がすでに形成されていたことを意味する。この政治的連合こそが(ヤマト政権)※だと考えられている。※ヤマト政権またはヤマト王権ともいう

(3) 前方後円墳の構造

前方後円墳の後円部は棺を納める埋葬施設で、前方部は祭壇のある儀礼の施設である。大規模な古墳には2～3段の段築がみられ、各段の上部は平坦面になっており、各段の斜面は葺石が施されている。古墳の墳丘の頂部、各段の平坦面や斜面には(埴輪)が配列されている。石室や棺の中には、勾玉、銅鏡、武器、武具、馬具、装身具などの副葬品が納められた。

【古墳時代の五色塚古墳をCGで再現】



画像提供:神戸市教育委員会

② ヤマト政権

(1) ヤマト政権の誕生

ヤマト政権の成立過程については実はほとんどよくわかっていない。なぜなら、4世紀の日本についての文献は日本にも中国にも残っていないためである。それゆえ、この時代は「謎の四世紀」と呼ばれている。今のところ、古墳の被葬者や状態、出土品などから推測して、ヤマト政権の誕生は4世紀前半で、場所は奈良県の三輪山と葛城山に挟まれた小河川の発達した盆地であったであろうと推測されている。

(2) 東アジア諸国のようす

紀元220年に後漢が滅亡すると、周辺の諸民族への支配力が弱まり、東アジアの諸民族は次々と国家形成への道を進むことになる。中国東北部から興った(**高句麗**)は、しだいに領土を拡大し、紀元313年には中国の設置した行政支配区の楽浪郡を滅ぼし、朝鮮半島の北部を中国王朝に代わって支配した。朝鮮半島南部では、3世紀には韓族の馬韓・辰韓・弁韓という小国の連合が分立していたが、4世紀になると、馬韓から(**百済**)、辰韓から(**新羅**)が興り、それぞれ国家を統一した。弁韓は統一国家ができることはなく、加耶(加羅)と呼ばれる小国連合が存続する。

(3) 倭の朝鮮半島進出

4世紀後半に高句麗が朝鮮半島を南下すると、朝鮮半島南部から鉄資源を確保していた倭は、朝鮮半島に軍を送り高句麗と戦った。高句麗の(**広開土王**)の碑文には、391年に、倭が百済、新羅に侵攻し、399年には、百済が高句麗との約束を破り倭と同盟を結び、倭が新羅の国境を攻めたので、400年には、高句麗は新羅に救援軍を送り、倭の軍を撃退。404年には、倭の水軍が帯方郡まで侵入したので、広開土王自ら兵を率いて倭を大敗させたと記されている。倭軍はこの戦いで高句麗の騎馬軍と戦うために、戦闘に馬を使う文化を持っていなかった倭人も騎馬技術を身につけたと考えられる。そのために5世紀以降の古墳からも馬具が副葬品としてみられる。また、この戦乱に乗じて多くの朝鮮半島の人々が日本に連れて来られたと思われる。彼らは日本に多くの技術と知識をもたらした。

(4) 倭の五王

四世紀末～五世紀初めにかけて朝鮮半島において高句麗によって撃退された倭は、中国の宋王朝から倭の国内支配権と朝鮮半島南部に対する軍事権を得るために、度々、宋の皇帝に朝貢するようになる。『宋書』倭国伝によれば、倭の讚・珍・濟・興・武という名の五代に渡る王が421年～478年の間に十回に渡り官位・爵号を求めて朝貢している。この倭の五王は、『日本書紀』にでてくる履中・反正・允恭・安康・雄略の各天皇にあたと考えられている。次の上表文は478年に倭王武が宋順帝に朝貢した時の上表文である。

倭王武の上表文	『宋書』倭国伝より
興死して弟武立つ。自ら使持節都督倭・百濟・新羅・任那・加羅・秦韓・慕韓七国諸軍事、安東大將軍倭国王と称す。順帝の昇明二(四七八)年、使を遣して表を上りて曰く、「封国は偏遠にして、藩を外に作す。昔より祖禰、躬ら甲冑を擐き、山川を跋涉し、寧所に違あらず。東は毛人を征することを五十五国、西は衆夷を服すること六十六国。渡りて海北を平ぐること九十五国。王道融泰にして、土を廓き畿を遐にす。累葉朝宗して歳に愆らず。臣、下愚なりと雖も、忝なくも先緒を胤ぎ、統ぶる所を驅率し、天極に帰崇し、道百濟を遙て、船舫を装治す。而るに句驪無道にして、図りて見吞を欲し、辺隸を掠抄し、虔劉して已まず。毎に稽滯を致し、以て良風を失い、路に進むと曰うと雖も、或は通じ、或はならず。臣が亡考濟、実に寇讐の天路を雍塞するを忿り、控弦百万、義声に感激し、方に大挙せんと欲せしも、奄かに父兄を喪い、垂成の功をして一簣を獲ざらむ。居りて諒闇に在り、兵甲を動かさず。是を以て、偃息して未だ捷たざりき。今に至りて、甲を練り兵を治め、父兄の志を申べんと欲す。義士は虎賁し、文武は功を効し、白刃前に交わるとも亦顧みざる所なり。若し帝徳の覆載を以て、此の疆敵を摧き克く方難を靖んぜば、前功を替えること無けん。竊かに自ら開府儀同三司を仮し、其の余も咸な假授して、以て忠節を勸む」と。詔して武を使持節都督倭・新羅・任那・加羅・秦韓・慕韓六国諸軍事、安東大將軍、倭王に除す。	

【現代語訳】

興死して弟武立つ。自ら使持節都督倭・百濟・新羅・任那・加羅・秦韓・慕韓七国諸軍事、安東大將軍倭国王と称す。順帝の昇明二(四七八)年、使を遣して表を上りて曰く、「冊封されてきたこの国は貴国より遙か遠くにあつて、外敵に対して天子の藩屏になっています。遙かご先祖様から私の父に至るまで、代々自ら甲冑をまとって幾山河を踏み越え、休む暇もなく戦ってきました。東方の国を征すること五十五国、西方の国を服すること六十六国、海を渡って朝鮮半島を平定すること九十五国にもなります。王道はあまねくゆきわたり、領土を拓げ、境域は遠くまで及んでいます。歴代の倭王は、宗主である中国の天子のもとに使者を入朝させ、その年限を違えることはありませんでした。私は愚かしくもその器ではないのですが、忝なくも王統を継承致しました。統治するところを率いて天子にお仕えしようとし、百濟から尚遙かな道のりゆえ、航海の準備も怠らなかつたのです。ところが高句麗は理不尽にも百濟を併呑しようとして、半島の南部を掠抄し殺戮をやめようとしません。わが使者を天子のもとに遣わす度に、途中で高句麗に押し止められ、年限を違えず朝貢する美風を失っています。海路を進むことがあつても、ある時は通じ、ある時は通じないというありさまです。私の亡き父の濟は、高句麗が入朝の海路を塞いでいるのを知って憤り、戦備を整えた100万にも上る兵士たちも義声をあげて感激し、大挙出征しようとしておりましたが、その時、俄かに父の濟と兄の興とを喪い、まさに成就せんとしていた功も水泡に帰してしまいました。私は部屋に籠り、軍隊を動かすこともできず、これゆえに徒に安息して、未だに高句麗に勝利できていません。今に至り、兵器を調べ、兵を訓練し、父と兄の遺志を継ごうと思っています。節義ある人士も勇猛なる軍隊も、文官も武官も功を立て、白刃が眼前に交わろうとも顧みはしません。もし帝徳の四海を覆う恩徳によりこの強敵の高句麗を打ち砕き、我が国難を除いて太平をもたらしていただけるのなら、歴代天子への忠誠を変えることはないでしょう。私はひそかに自ら開府儀同三司を仮称し、その他の者にも官爵を假授して、(天子に対する)忠節に励みます。」と。

(5)ワカタケル大王の時代

1968(昭和 43)年、埼玉県の稲荷山古墳から多数の副葬品とともに鉄剣が出土した。そして十年後の1978(昭和53)年、それらの副葬品について保存処理をされた際に、この鉄剣(全長 73.5 cm)の身の表に五七文字、裏に五八文字、計一一五文字の金象嵌の銘文が発見された。銘文の内容は、「鉄剣を作らせた乎獲居(オワケ)の祖先の意富比埜(オホヒコ)から乎獲居(オワケ)に至る八代の系譜と、代々、杖刀人首(天皇の側近で護衛を務める親衛隊の隊長)として大王に仕え、自身(乎獲居)も獲加多支鹵大王(ワカタケル大王)の朝廷が斯鬼宮にあった時、その統治を助けたので、その記念としてこの鉄剣を作った」というものであった。この解読によって、1873(明治6)年に発見されていた熊本県和水町江田船山古墳出土の大刀の銘文中の判読できなかった「獲□□□鹵大王」が、同一のワカタケル大王であるということが分かった。このワカタケル大王とは、『日本書紀』に見られる「大泊瀬幼武天皇」とある雄略天皇であると比定されている。これらのことを総合して考えると、倭王武(=雄略天皇=ワカタケル大王)の時代までに、ヤマト政権の支配領域は、東は関東、西は九州にまで及んでいたと推測できる。



写真提供:さきたま史跡の博物館

(6) 渡来人

古代において、朝鮮半島などから日本に移住した人々のことを(渡来人)という。渡来人移住の波は、稲作と金属器をもたらした縄文末期～弥生前半、五世紀後半～六世紀初葉、七世紀末葉などで、移住した渡来人は100万人に達する。渡来の理由は、戦乱からの避難、亡命、派遣などさまざまである。ヤマト政権は渡来人の集団を各地に居住させ、彼らの技術と知識を活用できる職務を与えた。渡来人がもたらした技術には次のものをあげることができる。

①土木工事の技術

②のぼり窯を用いて、(須恵器)とよばれる硬い土器を造る技術

③鍛冶の技術

④馬具などを作る金属加工の技術

⑤養蚕や機織りなどで絹織物を製造する技術

また、(漢字)の使用も渡来人によって広まり、漢字の音を借りて倭人の名前や地名を書き表すようになった。ヤマト王権の外交文書などの記録の作成も渡来人が行なった。6世紀になると、(儒教)や(仏教)が百済から伝来する。

(7) ヤマト政権の政治制度

ヤマト政権は(大王)を中心に、大和とその周辺の豪族によって成り立っていたと考えられている。豪族は、先祖が同じだと信じられる集団を作って暮らしていた。この集団を(氏)という。この氏には血縁関係者のみならず地縁関係者も含まれていた。氏の構成員を(氏人)、氏人を率いる一族の長を(氏上)と言った。豪族らは氏単位に朝廷の職務を分担した。これに対し、大王はそれぞれの氏の家柄や地位を示す称号として(姓)を与えて、身分序列を示し豪族を統制した。このような支配制度を(氏姓制度)という。氏の名には、蘇我・葛城・平群など居住地名に由来するものと、おおとも・もののべ・なかとみなど職掌に基づくものがある。姓には、中央の有力豪族に与えられたおみ・むらじ、地方の有力豪族に与えられたきみ、地方豪族に与えられたあたえ直などがある。姓は代々世襲され、臣・連の姓を賜った豪族がヤマト政権の中枢を形成した。

<<< 関連語句 >>>

■ 騎馬民族征服王朝説…1949(昭和24)年に、考古学者、東洋史学者である江上波夫が提起した説で、4世紀後半頃に東北アジア系の遊牧騎馬民族が朝鮮半島を経由して日本列島に侵入し、統一国家を樹立したという説。

■ ^{えみし}蝦夷…古代、東北地方に住み、ヤマト政権に服属せず、そのためにヤマト政権が征服すべき対象として描かれている人々。

■ ^{くまさ}熊襲…古代、九州南部に住み、ヤマト政権に服属せず、そのためにヤマト政権が征服すべき対象として描かれている人々。

■ 仏教の公伝…百済の聖明王が欽明天皇の時に、仏像・経論などを伝えたとされているが、その年代については、『^{じょうぐうしやうとくほうおうていせつ}上宮聖徳法王帝説』や『^{がんごうじえんぎ}元興寺縁起』の538年(^{ぼご}戊午年)説と『日本書紀』の552年(^{じんしん}壬申年)説がある。538年説の方が有力とされている。

〈〈 参考図書 〉〉

- 『中学社会 歴史』（平成24年発行 教育出版）
- 『改訂版 詳説日本史研究』佐藤信・五味文彦・高埜利彦・鳥海靖編（平成20年発行 山川出版社）
- 『改訂版 日本史⑩用語集』全国歴史教育研究協議会編（平成21年発行 山川出版社）
- 『もういちど読む 山川日本史』五味文彦・鳥海靖編（2009年発行 山川出版社）
- 『アナウンサーが読む 山川詳説日本史』笹山晴生・佐藤信・五味文彦・高埜利彦編（2013年発行 山川出版社）
- 『Story 日本の歴史 古代・中世・近世史編』日本史教育研究会編（2001年発行 山川出版社）
- 『古墳とその時代 日本史リブレット4』白石太一郎著（2001年発行 山川出版社）
- 『大王と地方豪族 日本史リブレット5』篠川賢著（2001年発行 山川出版社）
- 『倭の五王 日本史リブレット人002』森公章著（2010年発行 山川出版社）
- 『農耕社会の成立 シリーズ日本古代史①』石川日出志著（2010年発行 岩波新書）
- 『ヤマト王権 シリーズ日本古代史②』吉村武彦著（2010年発行 岩波新書）
- 『古代国家はいつ成立したか』都出比呂志著（2011年発行 岩波新書）
- 『東アジアにおける国家の形成 日本史講座第1巻』歴史学研究会・日本史研究会編（2010年発行 東京大学出版会）
- 『倭国のなりたち 日本古代の歴史1』木下正史著（2013年発行 吉川弘文館）
- 『現代語訳 魏志倭人伝』松尾光著（2014年発行 株式会社 KADOKAWA）
- 『新訂 魏志倭人伝・後漢書東夷伝・宋書倭国伝・隋書倭国伝』石原道博編訳（1985年新訂版発行 岩波文庫）
- 『中学総合的研究 社会』（改訂版 平成21年発行 旺文社）
- 『中学社会 自由自在』（改訂第2刷版 平成25年発行 受験研究社）
- 『中学歴史の発展的学習』藤井譲治編著（2007年発行 文英堂）
- 『徹底演習テキスト 中学歴史』（2013年度用 受験研究社）
- 『シリウス21 歴史Ⅰ』（育伸社）
- 『中学実力練成テキスト 歴史』（文理）
- 『新中学問題集 歴史Ⅰ』（教育開発出版株式会社）

〈〈 資料提供協力 〉〉

- 『CG五色塚古墳画像』（神戸市教育委員会・神戸市埋蔵文化センター）
- 『金錯銘鉄剣写真画像』（埼玉県立さきたま史跡の博物館）